

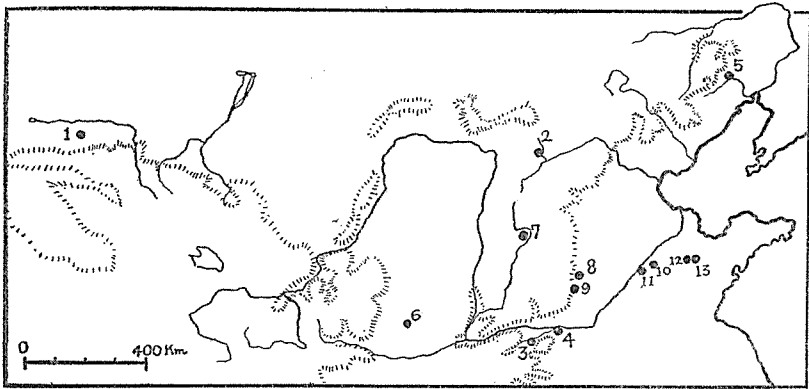
北支那石窟構造論

水野清一

1

北支那における石窟、すなはち石窟寺院はいろいろの觀點から議論に上せうるのであるが、まづここではその構造について論じたい。

北支那において石窟寺院が營まれるやうになつたのは申すまでもなく佛教の流傳した以來のこと
 で、その造構のもとづくところはもちろん西域、印度の石窟寺院にある。したがつて支那でいちばん早
 く開鑿せられたのはその西陲たる敦煌の地であるらしい。甘肅省の敦煌千佛洞の創始は符秦の長始三
 年^{西曆三五三}もしくは建元二年^{西曆三六六}といはれてゐる。ついで北魏文成帝の時^{西曆四六〇}に山西省大同雲崗の
 石窟寺院が開鑿されはじめた。北魏の孝文帝が洛陽遷都^{西曆四九三}の後は主として洛陽附近の伊闕龍門に
 おいて石窟造營が行はれた。しかしまた河南鞏縣や陝西郿縣、甘肅涇川乃至滿洲國義縣などにも北魏
 時代の石窟がある。そのうち、北魏が衰亡し東西魏にわかれ^{西曆五三四}北齊、北周と分裂した時代^{西曆五五〇—五八〇}



1, 敦煌千佛洞. 2, 大同雲崗靈巖寺. 3, 洛陽伊闕龍門. 4, 靈巖石窟寺, 5, 滎縣黃佛洞. 6, 鄆
 澤諸洞. 7, 太原天龍山. 8, 磁縣武安縣靈巖山. 9, 安陽寶山. 10, 濟南龍洞黃石崖等. 11, 肥
 城五峯山. 12, 益都雲門山. 13, 益都駝山.

第一圖 北支那石窟分布圖

において鄆河南臨漳と晉陽山西太原とが首都、副都となるにおよんで、
 晉陽の西に天龍山石窟が、鄆都の西に響堂山石窟が營ま
 た。同じく北魏北齊時代にかけて山東省濟南黃石崖、龍洞
 大佛寺、肥城蓮華洞等も開鑿され、兩魏隋にかけて寶山の
 小石窟が開かれた。隋唐時代においては敦煌、龍門、天龍
 山をはじめとして、山東雲門山、駝山等の造窟が行はれ、
 特に後者には隋代の造營が多い。圖第一
 かくて石窟の造營はほとんど北支那全般にわたつて行は
 れ、さらに小規模のものをひろふとその分布の密度は一層
 増大する。時代をもつていへば北朝から隋唐、すなはち四
 世紀から七八世紀におよんで盛大に造營されたのである。
 その間に地域的、時代的相違が見出されることはおのづか
 ら當然である。いまは主としてその時代的變遷の一般を論
 じたい考へであるが、はるかにその造營が衰微し、わづか
 に敦煌その他に若干の遺構を残す五代宋元以後のものにつ

いては特に言及する必要を認めない。

2

これらの數多い石窟は精密な測圖を缺くのでこまかい比較をするわけにはゆかない。たゞこれを構造の上からおほざつばに分類すれば、尊像中心の石窟と塔廟中心の石窟とに分せられると思ふ。これは構造上の二大別であるとともに石窟造營の意義からいつてもまた別種の範疇に屬するものである。

尊像窟は北魏特に雲崗初期の大窟第五、第六、第二十では圓い平面形をもち、圓い天井をもつてゐる。尊像は大きく後壁につくられ、左右壁には一まわり小さい佛、もしくは菩薩像がぎざまれる。つまり大きさによつて全體がひとつに統一されてゐるわけである。この大像を中心として圓頂の石窟が設計されてゐる。龍門においてもその大窟第三、十三、二十二、三十一は同様な構造をもつてゐる。雲崗の大窟は圓頂圓形の石窟といつても、完好的な圓形を描かない。平面圖は楕圓形になり、斷面圖も砲彈形になる。それに尊像が極度に大きく、石窟は全く尊像に壓せられてゐる。石窟を造營したといふよりも石佛をぎざむために窟窟を開鑿した觀が深い。雲崗で石窟と石佛との關係がやゝ整備されたものは大佛洞第五である。ついで龍門賓陽洞第三は圓頂圓形のもつとも整備した石窟として出現した。左右にも中央と同様な佛三尊

を見るが、それらは佛立像で中央の座佛とは制を異にし、大きさもやゝ劣つてゐるので、圓頂圓形の石窟空間と相俟つて窟内はよく統一が保たれてゐる。龍門古陽洞^{第二十}と蓮華洞^{第十}とは開鑿の事情をやゝ異にするため左右側壁は長く延び、平面圖は一端の圓い長方形をなし、天井もかまぼこ状をなす。側壁には多數の小龕が營まれ、奥壁



第二圖 龍門 賓陽洞

の半圓形に配列された諸尊によつて窟内は統一されてゐる。

かういふ場合、雲崗大窟は尊像が主で石窟が従、龍門大窟は尊像と石窟がよく緊密に結合し、その間に寸分の隙も見出せない。そしてその典型は何といつてもやはり賓陽洞^{第二}であると思ふ。石窟の中心はいかなる場合においても入口に正面する最奥中央にあることはいふまでも

ないところである。しかるに圓形圓頂の形式ではこの最奥中央が圓滑に窟内周壁を統合する。切斷されることなく、諸壁の對立といふことはない。そしてこの中央奥壁に廣大な擧身光がつくられる。擧

身光は彎曲して石窟壁面となり、中央三尊佛をつむ。左右の三尊佛もほゞ同様に營まれるが、石窟中心にある中央群の優勢は中央尊像の結跏趺座といふ特殊形式および大きさの優越などから増大する。かくて中央三尊の中心たる座佛の大像は擧身の光背が彎曲した中心に凝集する。これは構造的にも觀念的にもこの石窟の支配者である。しかもこの中心大像は光背、すなはち奥壁に密着する。吸着して壁面に沿うてわづかながら彎曲する。大像のプロフィールを見よ。腹部を中心として上下に彎曲する。顔面はやゝ前に俯してかゞみ、下裳は前にはねる。龕壁(或は光背)の彎曲に統制されたのは北魏像一般のプロフィールにおける特徴である。ひるがへつて正面形を見ればこの座像は下裳が開いて二等邊三角形の構圖をとる。そして垂下する並行褶線が構造の中心を二等邊三角形の頂點、すなはちやゝ俯眼の顔面に集中させる。これが石窟構造上の中心であり、また觀念上の中心でもある。すべてがこゝに集中する。入口上部に開かれた窓からは光がこれに集中する。北魏石窟はこゝに焦點をつくつて、その他の部分は石窟の暗影のうちにはぼやけて見える。急激でなく漸層的にしづかにぼやける。もう一步進んでいふならば龕窟の凹面に凝集した光は佛の御前にひれ俯す敬虔なる信徒の心に反射する。石窟の構造はそしてまたその理念は俯眼の慈眼に集中し、佛徳を仰ぐ對者の面に反映する。北魏の尊像窟に對する觀者の位置はかくのごとく嚴密に規定されてゐる。北魏の尊像窟においてはこれ以外の觀方はありえないのである。唐代の尊像のやうにその周圍をめぐりつゝ觀られるといふ餘裕をの

こさない。つまり鑑賞といふやうな餘地は全くのこされてゐないのである。こゝでは敬虔なる信徒として對するよりほかの立場は全然ありえないのである。第五圖

賓陽洞の開鑿は五百年代の極く初頭にあるが、この頃にできた龕窟はすべて同様な求心的構造の原



第三圖 雲崗小龕(第十一洞外)

理によつて開かれてゐる。これは龕窟ばかりでなく、獨立像においても見るところのものであつて、正に五百年初頭を風靡した構造原理である。試みにもろくの北魏佛龕第三圖を想起し、もろくの北魏像を想起して見られたい。これが北魏様式といはれるものゝ基本的特徴であることがわかると思ふ。

もしこの特徴づけが正しいとするならば、雲崗大窟の諸例はなほこれに至る道程にあるものとして、やゝ緊密を缺く構造も理解されるし、龍門蓮華洞尊像のやゝ並立的傾向もつぎの構造原理への移行を示すものとすれば興味深く觀せられる。

北魏の尊像窟は上述した圓形圓頂の一形式にとゞまるものではない。このほかに方形平頂の尊像窟も小規模な石窟中にしばしば見出されてゐる。

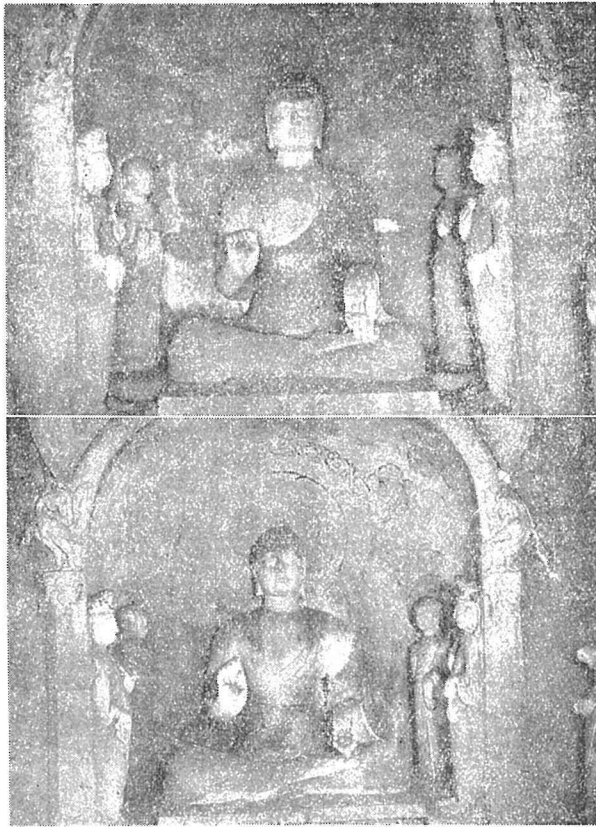
方形平頂の石窟には圓形圓頂の石窟とちがひ、自然に各面が分立する。天井が獨立し、周壁は並立する。しかし、並立しても全く同格に並立するのはつぎの時代の構造原理であつて、こゝではなほ主と従との關係がすこぶる明白である。すなはち、第一に左右壁を多數の小龕で埋め、奥壁に中心的大龕をつくる場合は雲崗大佛洞、龍門古陽洞、蓮華洞に似てたゞ圓形圓頂が方形平頂となつただけである。奥壁中尊の主導的位置はかはらず、やはりその龕形による求心的効果は認められる。第二には左右壁にもひとつの大龕を配する場合で、これでは奥壁の大像と左右壁の龕佛とがそれと對立することになる。龍門第十四洞・魏字洞第十七洞等はその例であるが、それでも北魏の石窟では奥壁の尊像には特別に龕形をつくらず、石窟奥壁に彫込まれ、こゝで全體を支配してゐる。左右壁の尊像はおのゝその龕形のうちに閉ぢこめられてゐる。それであるから圓形圓頂の石窟ほど純粹ではないが、とにかくこゝにもその求心的構造原理は失はれてゐない。

しかるに、これが北齊時代の石窟になると全然別の原理が石窟を支配する。まづもつとも北魏様式に近い造像をもつた天龍山第二、第三窟——したがつてその造營もいはゆる北齊諸石窟のうちではもつとも古く、或は東魏時代の開鑿ではないかとも思はれるのであるが——をとつて見るに、こゝでは既

に北魏石窟とはその構造原理を異にしてゐることが知られる。平面は方形であるが、天井は截頭角錐で、断面でいふと梯形をなす。截頭角錐の天井は北魏の穹窿頂の微意をうけたものといへばいへるが、それにもかゝはらず、その隅々にある框縁のごときつくりだしを考へれば、その意圖が壁面の融合にあらずして區劃にあることが知られる。三壁も完全に分立し、各壁に同格の佛が二俵侍をしたがへて並立する。三壁の尊像は形式、大小を同じうするのみならず、中央奥壁の尊像に對しても左右壁同様な框がもうけられ、龕形をなす。三壁の尊像が平等であつて、主と従との關係は明らかでない。こゝでは中央奥壁の支配的地位は三壁の同形たることによつてすこぶる稀薄にされてゐる。この分散の傾向が北齊尊像窟に一貫する構造原理である。

北齊の典型的な尊像窟においてはこの傾向がより徹底してあらはれる。天龍山、第十洞、第十六洞、響堂山南洞、第七洞は北齊尊像窟の典型であるが、各壁の龕形は正しく同形同大であつて、壁面いつぱいにひろがる。第四圖 龕底はまづ上下の彎曲を失ひ、時には左右の彎曲すら弛緩する。これに納められる尊像も北魏佛のやうな求心的構成をとらない。正面から見た二等邊三角形の構圖はくづれ、側面から見た弓なりの彎曲も消滅する。龕形の緊張から開放せられて、のびくんと並立することになる。或る時は三尊佛だが、しばし五尊佛、七尊佛の尊像が平板に羅列され分散する。だから龕の外構も尖拱龕よりは天蓋龕に向ひ、響堂山の周壁では全く天蓋龕のみを見る。龕底の弛緩、各像の分散、

各壁の分立があらはれ、分散の精神が瀰漫する。北魏のやうな求心的統合力は後退し、いはゞ分散のうち、或る統一が見出せるといふやうなゆるやかな結合を見るのである。動きのとれないやうな緊張



第四圖 天龍山第十六洞北壁、東壁

がゆるんで、一種のゆとりとか、自由といったやうなものを認めることができる。北魏石窟の觀點が窮屈にもたゞの一點に凝集するに對して、これは左右に移動しうる線もしくは面の觀點である。もとより唐代の立體的な觀點をもつ多様さにはおよぶべくもないが、とにかく構造にゆとりを生じたといへよう。第五圖 416

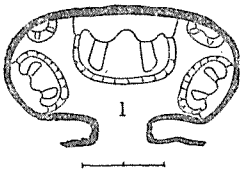
このゆとりはまた信仰上のゆとりでもある。全く一義的に規定された信仰態度にやゝ批判し、觀賞する餘裕を生じたものと見られる。それとともにかれらはまた三壁に三つの佛をつくつたのである。

北魏

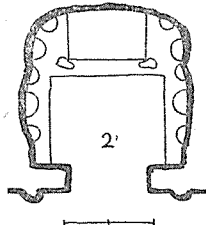
北齊

隋唐

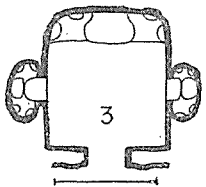
北支那石窟構造論



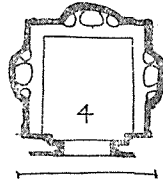
雲岡二八



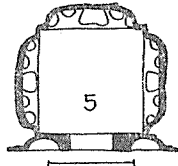
龍門三



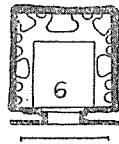
龍門一五



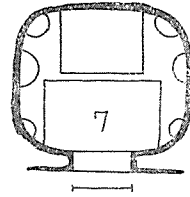
天龍山三



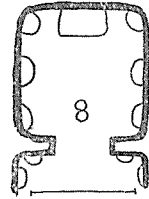
響音堂山七



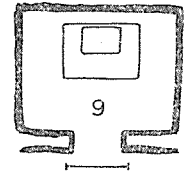
響音堂山四



龍門一



龍門五



龍門東山南

第五圖 尊 像 窟 變 遷

スケールは10尺單位

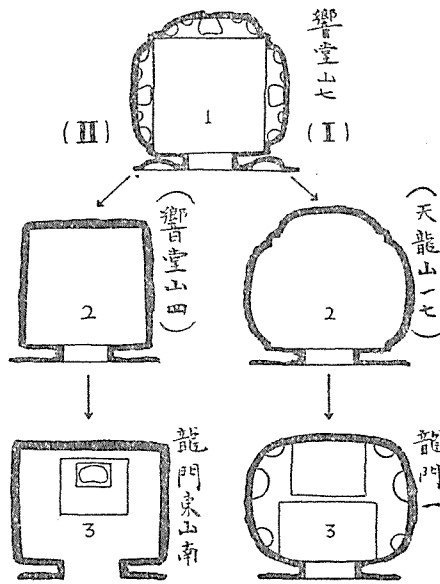
釋迦佛と同格な、しかも別種の佛をつくつたのである。安陽寶山の開皇九年西八九曆に開鑿した石窟はやはりこの式の三壁三龕制の石窟であつて、その記録によるとこれらの三佛は盧舍那佛、阿彌陀佛、彌勒佛であつたらうといはれてゐる。多佛の信仰は北魏窟にも認められる。しかし、その中心はあくまで釋迦牟尼佛であつた。しかるにこゝではむしろ同格の三乃至四佛國が分立するのである。こゝに四佛といつたのはこの時代に盛行した四面佛造像を考慮したためである。この三壁三龕制は四面佛と

構造的にも觀念的にも深い關聯をもつてゐる。

4

北魏窟の求心性はいひかへると龕を構造の原理としてゐることである。したがつて、北齊窟の分散性は龕形の弛緩にはじまり、龕形の喪失に至つて完成するのである。響堂山第四洞、第六洞はやゝ特殊の形式であるかも知れないが、ともかく周壁龕形の喪失したひとつの場合^{第六}である。こゝに至ればひとつの龕形すらのこさない、諸尊は龕形からの開放をえて完全に並立する。この場合は壁面からも開放されて獨立してゐる。諸像は何らのしめくゝりをもたず、方形窟の三壁に諸佛諸菩薩が完全に散開する。分散性は極度に完成されたわけであるが、こゝにまた新しい統一のしかたが暗示されてゐるのをいぬめない。それはこれらの諸像が石窟の空間内に一律にさらけ出されたがためである。龕形による隔離はやぶれて、ひとつの空間に包攝されたところにつぎの發展方向をふくんでゐると思ふ。これは北齊壁龕喪失のひとつの場合^{第六}である。いはゞ方形窟の壁面をのこして、龕底を失つた場合である。もし反對に壁面を失つて、龕底をのこした場合^{第六}には別の石窟、すなはち圓形圓頂の石窟が成立する。天龍山第十七洞は唐代の造營にかゝるが、この場合の中間階梯を示すものである。三壁に三群の尊像をもちながら、ひとつの圓形圓頂の空間に包攝されてゐる。このいづれにしても各壁の

小龕が消滅し、ひとつの大龕(實は石窟にほかならぬ)に包攝されることは同じである。とにかく三壁三龕分立の北齊窟に壁龕喪失の二つの場合があることを想定すればつぎの隋唐石窟の出自は容易に理解できる。



第六圖 壁龕喪失過程二種

右の想定よりすれば隋唐石窟は必然的に圓形圓頂と方形平頂の二形式をもつ可能性がある。實例では龍門羅鼓洞^{第一}、第二洞、第四洞等の唐窟、駝山第三洞、雲門山龕窟等の隋窟は第一の形式であり、龍門敬善寺洞^{第五}、永隆洞^{第九}、奉先寺洞^{第十}および東山諸窟の唐代石窟、駝山第一、第四、第五の隋唐窟は第二の形式である。駝山、雲門山の龕窟は隋代の開鑿、龍門第一、

第二・第四の三洞も貞觀十五年^{西曆六四一}以前の造營である。しかるに敬善寺洞^{第五}は顯慶三年^{西曆六五八}頃、奉先寺^{第十}は咸亨・上元年間^{西曆六七二―七五}、永隆洞^{第九}は永隆元年^{西曆六八〇}の造營にかゝる。東山諸洞に至つてはその年代を窺知しがたいが、奉先寺、永隆洞以後になることは諸種の事情からうたがひがたい。それであるから圓形圓頂のものは隋代および初唐に盛んで、方形平頂で中尊を後壁にほるものはこれにつ

いで初唐盛唐の間に行はれ、方形平頂で中尊の中庭に進出せる東山諸洞の形式はこれについて最後に出現したものと一應認められるかも知れない。それにしてもかういふヴァリエテイのあるうちに一



第七圖 龍門東山看經寺

貫した隋唐石窟の構造原理といふものが見出せると思ふ。それは北齊の分散的傾向に對立する或る種の統一である。

まづこれは窟内に龕をつくらない。單一の石窟空間に統合されてゐる。そしてその中心に——或は後壁中央に、或は窟中央に——大なる中尊の佛を安置し、この左右に大きな劣つた菩薩像、比丘像、乃至神王、力士の像を、或はより小なる供養者の像を順次に配列する。或る

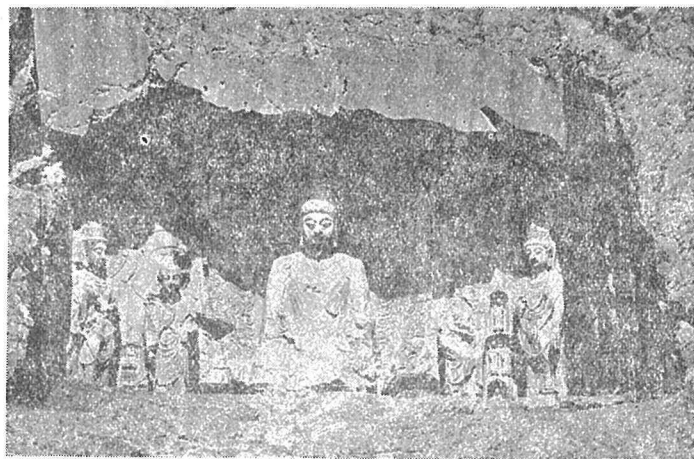
場合には周壁にめぐつて配置され、或る場合には後壁と前壁に配置される。諸像は高々と彫出されて、丸彫像に近い。特に或る場合には全くの丸彫像となり、窟内中央寶壇に安置され、あたかも佛殿内における内陣のごとき状態になる。石窟空間のいかにかゝはらず、これら高肉彫の石像が大小整

序されてかもし出す調和は何よりも見事な統一である。東山擂鼓台中洞に三個の獨立佛を入れたのはやゝ異例であるが、それでも決してこれを分散せしめず、中央に三佛を集め相對座せしめて、窟内の統一は見事に保たれてゐる。決して窟内に等量の二佛、三佛を並置せしめないのみならず、いかなる形式にもせよ數佛の並存は極力これを避ける。かくして隋唐の石窟は構造上からも觀念上からも緊密に統一されるのである。第五圖
718

この統一のしかたは木造殿堂の内部と全く一致する。北魏石窟を龕窟の名でいひあらはせばこれは殿堂窟の名に値する。これに並行して木造殿堂風な手法がまた石窟の細部にあらはれる。木造模倣の點ではむしろ北齊窟の方が盛んであるが、龕形、拱門等の併用がなくなつただけ唐代石窟の方が木造殿堂の模倣も純粹にあらはれてゐるといへよう。そして唐代殿堂窟の究局した形式を吾人は龍門奉先寺に見る。第八圖 奉先寺は高宗の勅願で、上元二年西曆
六七五に竣成した。盧舍那佛を中心に二菩薩、二羅漢、二供養者を後壁に、神王、力士の二像を左壁および右壁に彫出してゐる。尊像は周壁に固着するといへ、その高肉彫はほとんど丸彫像の浮出した觀がある。この石窟上部は天井が完備せず、かへつて石壁に枘穴をうがち、これによつて前面に木造の堂宇をかまへたものと見える。つまり石窟と殿堂との折衷形式である。そしてその構造の精神よりいへばむしろ木造殿堂に從屬したかたちである。

殿堂窟は龕窟の統一にくらべるとそれほど窮窟でないといへる。龕形の統一が中心の一點に凝集す

るといふやうなものでなく、中心があつて離れないといふ程度のものである。完好的な諸尊像の調和に



第八圖 龍門奉先寺

よつてまづ統一の中心ができる。したがつて、その石窟空間が圓形圓頂でも方形平頂でも深く問ふところはない。むしろヴァライエテイをもちながら統一を缺かないといふところに特色がある。北魏龕窟の統一が龕にしたがふ構築的なものであるといふならば、これは尊像にしたがふ人態的なものであるといへる。また前者が主として構造的統一であるに對して、これはむしろ觀念的統一が主役を演じてゐることとなる。たゞ構造の上よりすれば龕窟の統一は動きのとれぬ求心運動であり、殿堂窟の統一は融通のきく遠心運動である。つまり前者ではすべてが中心の一點に向ひながらもその主要なものはずべて外廓にある、後者では主要なものはずべて中心にあつて外周に向ふほど次第にぼやけてゆく。そこにはやゝ多様な信仰の態度が包攝されうと思ふ。尊像の周圍をめぐりつゝその姿態をながめるといふやうな態度もゆるされるが、尊像を十方に

擴充してその理念を、でつち上げるといふやうな態度もゆるされてゐるやうに見える。

5

さて翻つて塔廟窟に一言したい。

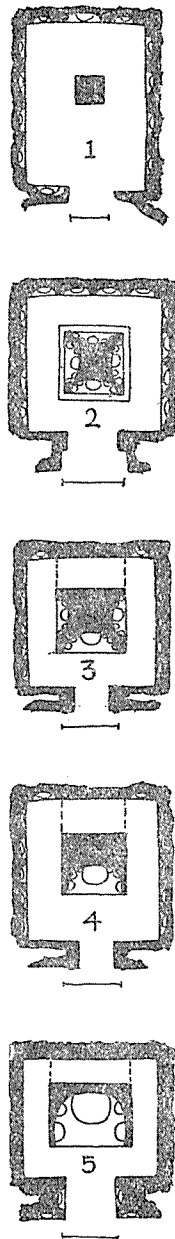
北魏、殊に雲崗の塔廟窟は窟内に明瞭な塔形をつくつた。雲崗第一洞、第二洞、第六洞、塔洞西端窟はすなはちそれであつて、特に塔洞は五重の木造形式による塔を中央に彫りきざみ、各層各面に若干の佛龕を開いた。第一、第二、第六洞は重層にてやはり木造塔の形式をとる。たゞ第六洞ばかりは佛龕が大きく一面にひとつなので、尊像のための構築か見え、つひ塔形たるに氣がつかぬが、やはり木造塔を模した初層の瓦屋根など塔たるは明らかである。また周壁下部にめぐる低い屋根形は正に塔廟をかこむ閣廊を模したものであらう。しかしいづれも方形の塔で、印度西域に見るやうな圓形の塔はない。石窟もおのづから方形であり、平頂である。滿洲國義縣萬佛洞の第一洞、甘肅涇川縣下王母洞は雲崗第六洞にほゞ一致してゐる。

河南龍門には塔廟窟なく、鞏縣石窟寺には第二、第三、第五洞にこれを見るが、もはや單層にして塔形をせず、たゞの方柱状であるらしい。しかし雲崗第六洞のごとく各面にはひとつの大きな佛龕をもち、尊像をきざみ込んでゐる。これでは四面四佛があまりに顯然として、塔形は後退したことになる。

る。塔形に重點のある間は中心にある塔形によつて一應窟内は統一されてゐるわけであるが、尊像に重點がおかれると各面各龕があまりに顯然として、各面の分立が目立つ。これは北齊尊像窟の三壁分立に應ずるもので、年代からいふとその先驅をなすものである。

しかるにつぎの時代になると、これらの方柱は響堂山の北齊窟にしばらくあらはれ、天龍山の隋窟第八に至つて盡きる。要するに方柱制は北魏末の鞏縣石窟から、北齊時代の響堂山を経て、隋代の天

第九圖 塔廟窟變遷
鞏縣五 響堂山一 響堂山二 響堂山中
スケールは十尺單位



龍山石窟に至るまで繼續して行はれたわけである。その特徴とするところは各面の分散にある。四周の空間は至つて狭く、窟内はおのづから廻廊然として全體を一望の下にあつめることは不可能である。塔形たる意識は次第に稀薄になつてゐる。響堂山の方柱洞ではすべて上部は後壁と連接し、後方はさながら隧道状をなす。四面四佛から背面の一龕を省略して三面三龕洞^{第一}となり、また左右の龕を省略して正面一龕洞^{第二}となる。塔形の後退に反して龕像は重視され、つひに正面一龕は深く大きく彫

込まれ全方柱を空洞化し、尊像は肉高く大きく切出されて、あたかも殿堂内陣の觀を呈するに至る。響堂山中洞の場合すなはちこれである。第八圖 これがもう一步前進すれば塔形(方柱)は完全に消滅し、尊像中心の石窟と轉成し、別系統より發展した隋唐殿堂石窟、特に内陣をもつ殿堂窟の形式と合致するに至るのである。

そも／＼塔廟窟から尊像窟への推移は塔廟禮拜から尊像禮拜への變遷である。たゞ尊像窟といへば北魏にもあつたわけであるから嚴密にいへば尊像窟へ單一化したといはなければならぬ。塔廟禮拜が消滅——實は變質したのであるが——して、尊像禮拜專一になつたのである。このことは塔中心の伽藍から殿堂中心の伽藍に變遷した寺院建築の推移に照應してゐる。

塔廟禮拜といふのは佛舍利、もしくは佛の靈蹟に關聯した信仰である。さういふもの、或は場所を記念し、象徴するところの塔に對する禮拜は歴史的な佛陀、すなはち佛身に對する記念的、直接的な信仰である。南朝のことはしばらくおくが、北朝、殊に北魏においては尊像についても同様な考へが包藏されてゐる。北魏の尊像はつねに何等かの意味において佛陀の生涯に關聯した尊像である。佛身の尊像である。たとへば魔衆をともし降魔像であり、鹿の添せられる初轉法輪の像である。これといふ標示の見出せないものも何らか佛陀の生涯に因んだ本生圖、佛傳圖中の像である。少くともさういふものから造像形式を假りてゐると思ふ。この時代に本生圖、佛傳圖の盛行した理由もこゝにあつ

たのであらう。つまり北魏では段階的には種々な相をとるが、要するに単一な佛身に對する信仰、いひかへれば塔廟的信仰であつたといへる。

これに對して北齊、隋唐の信仰では佛身的契機が次第に後退する。こまかい議論は圖像論にゆづるが、要するに各壁の分立によつて四方の諸佛に分化する。諸佛は各屬性を發揮して特殊佛に轉化し、諸佛の淨土を形成する。特殊佛とはたとへば阿彌陀佛とか、彌勒佛とか、藥師佛とか、或は盧舍那佛とかで、佛身を離れて超越身をうる。各壁の佛國は分化しながらも、たがひに相似たものであつて並存するが、つひに隋唐窟に至れば特殊佛が一窟を支配し、石窟に關するかぎりではもはや特殊佛でなくなる。理論的に完成された超越身である。だから石窟は尊像窟になり、尊像は理論的、間接的になつた超身佛となり、これを信仰および構築の中心として隋唐諸石窟は造營されたのである。この間の事情は一般寺院とも共通するであらう。

6

以上において吾人は塔廟窟から尊像窟へ、龕窟から殿堂窟へ、そして石窟から殿堂への推移を追究した。これが北魏から隋唐に至る一般的傾向であつたとともにまた北支那石窟史の概要である。唐代以後において石窟造營が頓におとろへたのもまた所以ありといはなければならぬ。